

不登校による自己否定感と安心して失敗できる居場所

フリースクールの現場から考える社会課題として

石山 佳秀、Yoshihide Ishiyama（認定 NPO 法人フリースクール三重シュール）

1. はじめに

2003 年にフリースクール三重シュールをオープンしてから「不登校を問題視しない」ことを訴え、自己肯定感を育める場であることを方針にしてきた。自己肯定感を育むためには「ありのまま」を認められる関係が大切であり、スタッフは子どもを叱る・褒めるなどの評価をしない。評価のない居場所で育つ子どもから「自分でいい」という声が聞けることはスタッフの喜びでもある。

この三重シュールの活動とともに、入会相談と不登校相談（1 回 2 時間、約 1,000 件）を行ってきた。相談から感じるのは、子どもは不登校の自分を問題視される時間を重ねると、自分に対する否定的な実感（以下、自己否定感とする）を深めて、成長の足を引っ張られることになる。「不登校が問題視されて自己否定感を深めることが問題」であることを痛感してきた。

本来、子どもが安心して生きて、のびのびと育つためには、「自分でいい」という自己肯定感が育まれるための環境が必要である。不登校が問題視される環境はその対極になるのである。

本稿では、不登校から自己否定感を深めること及び自己否定感の先にある社会課題を考察し、三重シュールの社会課題への取り組みを紹介する。

2. 学校に戻れないことと自己否定感

毎年秋に、不登校児童生徒数が発表されるが、同時に、登校するようになった（以下、学校復帰とする）数も発表されている。児童生徒の問題行動・不登校生徒等生徒指導上の諸課題に関する調査では、「指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒」と表現されている。2022 年度の小中学校での人数は、81,375 人で不登校全体の 27.2%であり、その年度で学校復帰しなかった子

どもは 70%以上になる。もちろん、年度を超えて時間をかけて学校復帰する子どもはいる。

国や県などの教委が、不登校支援において社会的自立を目指しても、学校現場がこの方針を共有しているとは言い難い現状がある。

常に学校に戻ることを期待・誘導・指導された結果、学校復帰できなければ、その子どもは自己否定感を深めていることが考えられる。

私が話を聞いた若者は、小・中・高・専門学校（中退）で不登校を経験し、毎年新年度になると周囲の意向や指導で登校を試みるが、数か月後に不登校になることを繰り返した。「年が過ぎるごとに自己肯定感が削られてきた」と言っている。

3. 学校復帰と自己否定感

一方で学校復帰すれば、安心して大人は多いが、それはゴールではない。松本俊彦によれば、10 代と 20 代の自殺を調査したところ、大半が学齢期に不登校を経験し、その不登校経験者の 75%が学校に復帰していたのである¹⁾。松本は、「不登校はときに必要である…大人はつい『学校へ戻ることがゴールである』と考えてしまいがちですが、それはあやまりです」と言っている。

この自殺した人の中には、学校復帰を通じて過剰適応を求められ、逆に自己否定感を深めることになっていたケースがあると考えている。周囲から学校復帰を期待・誘導・指導されて学校復帰を喜ばれれば、一時、自己評価は上がる。だがそれは、不登校の時の自分を否定し、復帰した自分だけを肯定することになるのではないか。そうならば自分自身の肯定には、学校復帰が条件になる。その後、自己評価が下がることがあれば、自分自身の否定につながりやすくなると考える。

そもそも、学校復帰したからといって自己肯定

感を育める訳ではない。学校復帰できなくても「自分でいい」というのが自己肯定感である。

不登校支援は、自分の不登校経験を肯定的に整理し、学校復帰に関係なく自己肯定感を育めるものであることが重要だと考える。

4. 自己否定感から追い詰められてひきこもる

「自分はダメ」という自己否定感を深めれば、他者の評価が気になり他者の眼差しを避けたいとなると考えられる。また、親が自分の不安を子どもにぶつけて、子どもの心を置いてきぼりにした対応をすれば、親子の関係は悪化する。この親とはコミュニケーションをとることが難しくなる。

このように自己否定感を深めて親子関係が悪化すれば、ひきこもるリスクが高くなると考えている。ひきこもることは、その人にとって必要で意味がある。だが、不登校の対応や指導によって、ひきこもらせることは問題である。

5. 不登校から失敗することがこわい

不登校によって自己否定感を深めた子ども・若者から、しばしば「失敗することがこわい」という声を聞く。失敗しない最も有効な方法は「新しいことをやらない・選択しない」ことだろう。

斎藤環は、「一般に『ひきこもり』とは、不登校や就労の失敗をきっかけに、何年もの間自宅に閉じこもり続ける青少年を指す言葉です」²⁾としている。不登校は不本意な体験かも知れないが、問題は周囲の否定的な眼差しや対応によって不登校を失敗と受け止めざるを得ないことである。

本来、成長は試行錯誤の連続であり、失敗は大切な経験になる。だが私たちの社会は成功体験で自信を持たせようとする教育や支援が中心にある。

また、保護者は様々な「世間」とつながり、子どもたちも「同質性によって結びついている共同体である『世間』」³⁾の中で生きて育っている。将来への不安に加え、子ども自身が不登校することを「世間」からの逸脱と感じ、「人生の失敗」のように捉えても無理はない。引き続き同じ世間に身を置きながら、「失敗するかも知れない」こ

とに取り組むことは簡単なことではない。

6. 安心して失敗できる居場所を目指して

失敗をおそれる子どもに他者が勇気を求めれば、「ありのまま」を否定することになる。三重シュールでは、スタッフが子どもの「試行錯誤にいつまでも付き合うこと」と「約束しない（約束にさせない）」ことを大切にしている。子ども・スタッフ・保護者の課題を分離し、スタッフが子どもに約束をさせずに試行錯誤を応援する中で、私たちは子どもたちの成長を目の当たりにしてきた。

また、三重シュールの「いつでもつながるワーキング®」⁴⁾では、アルバイトや仕事をしたいとき、仕事を探す、履歴書・面接の準備、先方へのアポなどを子どもの希望に応じてスタッフがお手伝いしている。これは卒業後も可能であり、いつでも子どもたちの試行錯誤を応援している。

三重シュールの卒業は、高卒の資格をとった3月が多い。卒業後も三重シュールとの関りを希望する場合は、週に一日、ボランティアスタッフとして活動に参加できる。居場所に身を置きながら、これからの自分を考えて自分のペースで歩んでいる。この試行錯誤の中で、それぞれが自分の社会的自立につなげている。

以上の「約束しないこと」、「いつでもつながるワーキング®」、「卒業後のボランティア」は、子どもたちから学び、子どもたちといっしょにつくってきた。子どもたちが安心して失敗できるための支援や環境になることを願っている。

さらに安心して失敗できる環境を増やしていくことは、社会の課題であると考えている。

引用文献・注

- 1) 松本俊彦 (2022) 「不登校には大事な意味があり必要です」『不登校新聞』通算 572 号 p. 7.
- 2) 斎藤環・畠中雅子 (2022) 『新版 ひきこもりのライフプラン』(岩波ブックレット) p. 3.
- 3) 泉谷閑示 (2009) 『「私」を生きるための言葉 日本語と個人主義』(研究社) p. 40.
- 4) 商標「いつでもつながるワーキング」登録番号：第 6332157 号

フリースクールにおける学びと自立について —当事者の経験から

宇陀 直紀、Naoki UDA、(つくるがっこうイホルラ舎 スタッフ)

1. はじめに

不登校の子どもへの関わり方の視点として学校復帰のみならず社会的自立を視野に入れた支援のあり方が議論されている。学校外の学びの場としてフリースクールの活動が各地で展開されており、不登校の子どもの居場所や学びの場として大切な役割を担う存在だと考えている。

筆者は小学校 1 年生から不登校になり、その後いくつかのフリースクールに通っていた経験がある。本稿では、不登校の当事者の経験を一例として、フリースクールにおける学びとその後の自立について考えたい。

2. 不登校になった時の社会のまなざし

私は幼稚園に通っていた頃から、集団の中で何かをするのが苦手な傾向があり、一人で興味のあることに没頭する性格だった。小学校に上がると 1 年生が 9 人、全校生徒合わせて 36 人の小さな学校であった。隣近所は全て知っているような地域柄もあり、集団行動からはみ出る者として周囲との関係構築が難しい子どもだった。小学校に入学して間もなく、学校に行きたくないと言うようになり、ほぼ毎朝担任の先生が迎えに来ていたが拒否し続ける日が続いた。

私が学校に行っていないことはすぐに広まるような地域であり、外に出て知っている大人に遭遇しようものならあいさつ代わりに「今日は学校休み?」「なんで学校に行かないの」と繰り返し問われるような環境であった。

学校の先生からも、地域社会からも、親族からも、学校に行かないことが悪いことであるように責められ続け、他者への信用や将来の道筋を見出せない状況でひきこもる時期があり、その後学校以外の居場所としてフリースクールがあることを知った。

3. 居場所があることの安心と自立への不安

フリースクールは「いつ来て、いつ帰っても良い」場所であり、小中学校のように時間割が決められているわけではなく、自由に過ごすことができる。フリースクール全体の子どもの数も少人数であり、学年やクラスなどの枠組みがないため、小中学校のように横並びで誰かに合わせないといけない緊張感は少なく、一人ひとり

の自由な気持ちを守られる居場所だと考える。

フリースクールで過ごした時間は私にとって「自分が生きていてもいい」と最低限の安心を得られることで貴重な時間であった。

しかし同時に「学校に行っていないことで、将来は大丈夫なのか」という不安は常にあった。フリースクールに通っている間はいわば、「守られている」空間・時間であるが、自分の将来がどうなるのか、イメージが見出せないまま不安が重なっていた。

4. フリースクールでの学び

フリースクールでは、一人ひとりが自分でどんな風に一日を過ごすか、子どもたちに委ねられている。何もしない一日もあれば、ゲームをして過ごす一日も認められている。

その中でも、ミーティングはスクールでの活動を子どもとスタッフで話し合って考え、決めていく重要なシステムとなっている。自分で何をしたいか考えて、みんなに説明して、それを実行する過程は大きな学びになった。

通っていたフリースクールにはボランティアで参加している大学生スタッフが居た。主に心理学や教育学を学んでいる学生の方との交流を通して、自分自身の将来のことを考えるきっかけとなった。

小学校はほとんど行っていなかったため、教科学習やテストを受ける経験は中学 1 年に上がった少しの期間を除いて、全くと言って良いほどしていなかった。ボランティアの大学生の方との交流を通して、大学に進学したい気持ちや、将来に対するイメージがつかめてきたことで、教科学習にも取り組むようになった。やりたいことをゴールとして、そのために何をすべきか過程を考えて実行することは、ミーティングを通して自分のやりたいことを実現するフリースクールの学びに関連することだと考える。

5. フリースクールから一歩踏み出すとき

小中学校は義務教育であるため、フリースクールに通っていたとしても在籍校の児童・生徒としての身分がある。中学校を卒業するとフリースクールに通っている同学年や年上のメンバーは通信制高校に進学するが多かった。

フリースクールに通いながら通信制高校に進学しているメンバーの様子を見ていると、レポートの提出に苦しんでいるようであったため、自分には3年間を通して通信制高校で学ぶ気力はないかもしれないと思った。

卒業後の進路を具体的に考えるようになった中学3年生の夏ごろに、高卒認定試験（旧大検）というものがあることを知った。試験に合格すると高校卒業と同等の資格が得られて、大学や専門学校などに進学できる。履歴書に〇〇高校卒業とは書けないと言われていたが、大学への進学を希望していたため、高校卒業の学歴がどうなるかはあまり気にしなかった。

また、当時の生活上の課題として家から出たい気持ちが強かったため、高卒認定をパスして大学への進学を目指しながら、アルバイトをして一人暮らしする生活を描いていたことも、進路の決め手となった。

自分で働いてお金を得ることによって、不登校になった頃から感じていた自己否定や将来への不安が多少和らいだように感じ、自信にもつながっていった。

6. 進学、就職、社会のルールへの違和感

アルバイトをしながら高卒認定の資格を取得し、4年制大学に進学した。ようやく自分の学びたいことを学べる環境を手にしたと思ったが、入学当初から就職活動の話題やサークル活動、課外活動などが押し寄せてくることで疲弊してしまった。また、周りの同学年はいわゆる一般的な高校生活を経て大学に進学していたため、これまでの生活体験も違うことが多く、環境に馴染むことが難しいと感じた。

結局、最初に入学した大学は1年通い、2年生からは通信制の大学に編入学し、同時にフルタイムでの仕事を始めた。職場が変わることはあったが大学卒業後も同じ職場で働いていたため、いわゆる就活や就職することを目的としたアピールポイント作りの諸活動の経験がない。

不登校になった頃の経験やフリースクールに通っている時と同様に、横並びで評価されることに違和感を感じていた。振り返って考えると自分なりの社会への関わり方として、「どうにかなんとかなった」という気持ちでいる。

7. フリースクールのスタッフとして考えること

現在はいくつかの仕事をしながらフリースクールのスタッフとして自由な学びの活動に関わる機会をいただいている。自分自身も不登校の経験があってフリースクールに通っていたこと

で、共通の体験ではあるが、一人ひとりのこれまでの暮らしや経験の上があるため、日々の活動を一緒に楽しむ気持ちで過ごしている。

不登校の子どもたちが30万人近く居る時代で、正解や答えのない未来が待ち受けていると予想する。常識や正しいことに捉われてしまうのではなく、一人ひとりの直感や得意とすることを活かせるような環境が必要であり、フリースクールはそれらを実験できる場になれば良いのかと思う。

おわりに

ここまで自分自身の不登校体験やフリースクールでの学んだこと、その後の進路選択で考えたことなどを書いた。子どもたちや子どもに関わる仕事をしている人と一緒に考えながら、一人ひとりが自分の生活を守りながら自由に学べるあり方について今後も考えていきたい。

大阪から問う “不登校問題”

中林 沙也加 (Sayaka Nakabayashi) 大阪市公立中学校教諭

1. はじめに

従来不登校の問題は生徒本人、家庭の問題とされてきた。それを全て否定することはできないが不登校の生徒と日々向き合う中で不登校は個人の問題に帰結するものではなく、学校や社会の在り方であることに気づかされる。社会は「学校ムリならココあるよ」と第2、第3の学校以外の居場所を提示する前にできることがあるのではないだろうか。いま学校、社会はいかに変容するべきかについて提起し、考えていきたい。

2. 不登校を経験した生徒の声から

稿者は現在不登校特例校で勤務している。大阪市内全域から不登校を経験した中学生が登校する学校である。校則、制服など従来の学校では「当たり前」とされてきたものがゼロにした状態でスタートを切った。はじめは緊張状態であった生徒も慣れてくると自らの不登校経験を語るようになる。そこで共通したのは、これまで自分が在籍していた学校には「圧」が存在するという言葉である。生徒は何を「圧」と感じているのか、その正体は何なのか。どうすれば我々は「圧」から解放されるのかについて明らかにしたい。

3. 大阪の教育改革がもたらしたものについて

大阪府で 2008 年当時の橋下徹知事によって「教育非常事態宣言」が発信され、その下で学力向上緊急対策、2009 年には「大阪の教育力向上プラン」、その後は中学生チャレンジテスト、高等学校の再編整備計画、小学 5、6 年生の学力テスト「すくすくウォッチ」とあらゆる策が講じられた。

その改革のもと、教育の諸問題が解決するかの

ように思われたが、年々小中学生、高校生の不登校立は上昇し続けている。それはいったいなぜなのか。

「学力向上のためにやることは学力向上につながる」と現場では表立った声は上がらなくとも共通認識になっている。従来、大阪の教育は生徒の生活背景に迫った「教育は今日行く」、「靴減らしの教育」を地で行くものであった。しかし、各種教育改革と働き方改革が現場を席卷するに至った現在、現場では家庭訪問すらも「希望者のみ」になってしまったり、勤務時間外に保護者と面談を実施することも「本当にそれが必要なのか」と現場から歓迎されないムードができてしまったりと、教師のやりがいや専門性が奪われるに至っている。

5. 「みんなと同じことができない」

再び、不登校を経験した生徒の声に戻る。「みんなと同じことが同じタイミングでできない。すると、同級生からも先生からも心無い言葉が飛んできた。それが怖くて教室に入れなくなった。」という声が少なからず寄せられている。教育の「成果」を数字に換算するならば、コスパ・タイプよく目に見える数字を向上させるに増す方法はないだろう。そこに順応し、喜びを感じる生徒ばかりではないのが現実である。

6. 教育にとって急務なこと

不登校特例校ができた、学校以外の居場所ができたからよかったね……。本当にそうなのだろうか。変わるべきなのは「みんなと同じ」ことができない生徒を受け入れる余裕のない学校ではないのだろうか。また、それと同時に一人ひとりの子どもが幸せな子ども時代を生きることを待つこ

とができない社会なのではないだろうか。

それと同時に今を生きる私たち一人ひとりが
自分が限りある生をどのように生きたいのか、ど
んな社会が人間にとって幸せに生きることができ
る社会なのか・・・など、根本的な問い「そもそ
も論」に向き合う必要があるのではないだろうか。

青年期教育における集団の学びと仲間づくり

安達俊昭 ADACHI toshiaki やしま学園高等専修学校

はじめに

高等専修学校とは、学校教育法 124 条に定められた高等学校と同じ後期中等教育機関として、高等学校の枠に収まらない多様な教育を行い、専門知識と技能を身に着けることに重点を置く。

その学校専門のカリキュラムが高校卒業の単位として認められ、連携している高校の単位取得とあわせて高校卒業資格が取得できる学校である。

◇学生達に変化が現れ始めた 90 年代後半

90 年代後半、15 歳人口の減少が加速した頃に、本校ではそれより以前に入学して来ていた生徒の中で、発達の偏りや遅れをもつ学生や、中学校生活で何かと生きづらさを感じていた学生たちが入学を希望するようになってきた。比較的少人数でクラス運営をしていた本校では、読み書きや計算の苦手な学生たち、また運動や体育が苦手な学生が目立つ中、学校そのもののあり方が問われていた。本人はもとより家族の願いは、就職や将来のことよりも、毎日通える学校であったり、当たり前のように学園生活を過ごし、仲間を見つけ人間の幅を広げたいという願いがほとんどであった。その当時の新聞で発達障害を特集する記事から、教育ニーズの多様性や今でいう支援教育の必要性が生まれていた。

経理高等課程商業科として長らく「資格を取得し、社会に役立つ人間づくり」、また社会人として本校から企業への就職をすることこそが使命であると信じて疑わなかった時期、ある離職した卒業生と出会う。彼らは学業の詰め込みよりも、学生生活でもっと人との関わりを体験したかったのである。従業員同士の関わりや、社会での暮らしを十分に経験せずに社会へ出たところに、仕事はこなせるが、人との関わりが積み上がっていないために入社数年後に離職する人がいたという姿を

見て、これではいけない、もっと幅広い教養を身につけ、同世代との関わりを増やしてから社会に送り出すことが必要だと確信し、全国の学校（支援学校や高等学校、フリースクールなど）を見て歩き、学校壊し、学校づくりが始まった。

◇「失敗もあり」の体験学習

もちろん専科の授業が構成されている専修学校では、体育や芸術、音楽といった教科が少ない。本来の幅広い教養や暮らしの学びを求めている学生たちに、選択授業という形で少しでも経験ができるように、カリキュラムを少しずつ変更し、じっくりと時間をかけて取り組めるように、期限を設けない学びの形を模索した。「話し合ってゆっくり決めよう」、とか、「信じて待つ」といった生徒たちへの呼びかけが少しずつ功を奏し、「わからない」が自由に言える雰囲気づくりへ繋がり、クラスの教科授業でもそれぞれのゴールを模索して、課題の画一性を柔軟にした。

入学するまでの中学校時代では、何かと比較されることに疲れ、自分を出すということをせずに目立たないように過ごした日々があって、入学してからすぐに変われるかということ、そういうわけではない。左右をキョロキョロしながら様子を伺いながらの高校 1 年生が始まる。少しずつ雰囲気になれる人、なかなか慣れることができない人もいる。それでも全体の雰囲気か 1 日 1 日過ごす中でマイナスを浄化していく。

事実、在校生の中でも高校 3 年生になってやっと自分のことが少しずつ話せるようになってきたばかりで、「まだ働く自信はない」、「もっといろんな経験をしたい」という解答が多く、彼等は職業人としての技術や技能よりもむしろ、学生としての仲間との関わりと気持ちの成長を求めているとわかる。

◇高等部での3年間では短い～教育年限の延長～

3 年間の高等課程の教育で過去の紆余曲折を払拭し、やっとプラマイゼロという地点に戻ってスタートし、仲間の中で居場所ができ、やっと言いたいことが言えるようになった。しかし、3 年で社会へ、また違った環境の中へ挑戦できるかというそうではない。別科として設置した専攻科はそれを土台にその後の社会生活に生かして仲間と「自治」をすすめ、社会で生きていく力を養う。2 時間枠を使ったさらにダイナミックな実習や校外での演習を集団活動の柱にし、集団の中で自分と向き合い、苦手な所も受け止めながら共に日々を送ることを 19 歳、20 歳の青年たちの大きな課題としている。

◇専攻科での「暮らしの学び」

専攻科では学習内容に暮らしの目線が多く入っており、生活をともにする仲間と、ごまかしのきかない関係性の中、得意不得意を理解し合い、お互い様の精神で暮らしていくことが多い。だからこそ障害種別や重いか軽いかで考えたりする前に、1 人の人間として向き合うことを前提としているため、集団の中でことさらな平等主義を排除している。自然発生的にリーダーが生まれ、そして、フォロワーも形成され、共に暮らす集団になっていくのだが、どちらにも自分の向き不向きや要望、こうでありたい願いや悩み等がたくさんある。

また、青年期のモラトリアム期間として大人になるための移行期間でもあるため、仲間の中で「迷惑をかける」「心配をかける」「頼りにされる」「役に立ちたい」「見直される」など、青年の内面深くにまで響きあう付き合いは多くの時間の積み重ねが必要である。そこに教員も決して焦ることなく環境づくりをすすめ、彼らを信じて任せ自分の足で一步を動き出すことを大切にしている。それほど集団自治の中での響きあいは社会へ移行する中での大切な期間である。

リアルな現実社会を彼らの歩幅で歩いてこそ、学んだことが使え、社会で役立つ。そこが現実離れしてはいけない。「大人の都合」や「予定調

和」がありすぎでは意味がない。結果よりも過程を大切にし、失敗を糧として振り返り結論付けするまで、じっくりと待つ。専攻科は2年間だが、この自由な期間に気持ちの動きを感じ、社会にアンテナをたてて仲間と過ごしながら生きることが彼らの将来の幸せにつながると信じてやまない。

おわりに～スモールスクールの構想

どんな年齢層の学びの場も、以前のようなマス教育という知識の切り売り型の大衆教育はもはや学び手からは求められていない部分が見えてきている。核家族化で家庭教育の質も変化してきている今、ゼミ形式や少人数のクラス構想こそ、スモールスクールして多くのニーズに対応できる学びの場になり、障害あるなし関係なく、共に支え学び合えるコミュニティとして成立していけるのではないかと。贅沢を言えば、その中でもし三世代の関わりができれば、さらに厚みを帯びた暮らしの学びが実現するのではないかと思う。